京都芸術劇場 ニュースレター

Newsletter
shunjuza
studio21

vol.39
2017.12

特集
春秋座 能と狂言 ── 2P–5P
ホワイエ ── 6P–7P
12～2018年4月公演スケジュール ── 8P–11P

京都芸術劇場春秋座　芸術監督プログラム
市川猿之助 監修
藤間勘十郎 春秋座 花形舞踊公演 ── T•2P–T•5P

2017年1月29日　春秋座―能と狂言　『鵺』より　撮影：清水俊洋

企画・監修　渡邊守章

春秋座―能と狂言

2018年2月3日（土）14:00

会場：春秋座
演目：狂言「清水座頭」　能「三輪」白式神神楽
出演：観世銕之丞、野村万作、野村萬斎、
片山九郎右衛門、藤田六郎兵衛、大倉源次郎、
亀井広忠、前川光範　他

◉公演情報の詳細はスケジュール一覧〈P.10〉をご覧ください。

今年で９回目を迎える「春秋座―能と狂言」。歌舞伎劇場の空間で、能・狂言をご覧いただく春秋座恒例人気企画です。毎回、ご出演いただいている小鼓方の大倉源次郎さんは、能のルーツを探るために山形県の黒川能を訪ねたり、鼓のルーツを探るため海外へフィールドワークに行くなど「行動する能楽師」ともいえる方です。大倉源次郎さんに今回の演目、『三輪』についてお話を伺いました。

『三輪』のお能の謡の文句や所作の中に、古代の記憶が閉じ込められているように思います。

大倉源次郎インタビュー

古代のロマンが隠された物語

— 今回の演目『三輪』は奈良の三輪山のお話ですね。

源次郎（以下、源） ええ、奈良は面白いですよね。もうすぐ春日若宮おん祭（春日大社の摂社・若宮神社の例祭）ですね。高校生時分から随分、通いました。あのお祭りを見て僕はフィールドワークをちゃんとしないと、と思ったんですよ。

『三輪』のお話が作られたのは都が奈良から京都に都が移って久しい頃。今の京都の人たちは「天皇さんは東京に行っているけれど、もうすぐ帰ってくる」って言っているでしょ。ちょうどその状態が当時の奈良にあったわけです。「天皇さんはいつか奈良に戻ってきはるはずや」と。それで奈良の能楽師たちが奈良のことを忘れないように一所懸命書いて、このお能を作ったわけです。

— 今の状況と似ていると思うと親近感がわきますね。

源 そうですね。

— 『三輪』を観る前に、まず知っておかなくてはいけないのが、三輪の神様と伊勢の神様（天照大神）は同体だということと伺ったのですが。

源 そうです。キリ（一番最後）の地謡の文句にも

思へば伊勢と三輪の神。一体分身の御事。今更何と磐座や。

という謎めいた言葉がポロッと入っていたりするんですよ。

— 思えば伊勢（天照大神）と三輪の神は元々一体で、それぞれ分身で現れていることは今さら言うまでもないことだ、という意味ですね。

源 そうです。このお能は古くから伝わる「三輪伝説」と三輪山に天照大神がお祀りされていた頃のメモリアルのお話だと思っています。

というのも三輪山のすぐ近くにある3世紀の纏向（まきむく）遺跡からは、出雲大社造りのお社と伊勢神明造りのお社が並んで出土してしまっています。三輪の神様は出雲の神様と同じく国津神（土着の神）なんですよね。ということは大昔の豪族たちは、国津神と天津神（天照大神）を同じように祀っていたわけです。

恐らく奈良の能楽師たちは、そういった神話や伝説化していた大和の物語を、お能をツールに日本中に広めようとしたのではないでしょうか。当時は新聞やテレビはありませんからね。お能の謡の文句や所作の中に、古代の記憶が閉じ込められているように思います。

— それだけ伺っても非常にワクワクしますね。

源 そうですね。そして前シテで里女として登場する女は実は三輪明神なのですが、その三輪明神が檜原（ひばら）の奥の庵に毎日訪れ、花と水を運んでいます。その部分の謡がこれです。

三輪の山本道もなし。檜原の奥を尋ねん

「道もなし」というのは助けるすべ（道）が無いということです。つまり三輪の神様は、檜原の奥に住む高僧・玄賓に救いを求めて訪ねているのです。

— 神様が高僧に助けを求めるということですか！

源 そうなのです。そして後シテになるとは三輪明神が玄賓に

恥づかしながら我が姿。上人にまみえ申すべし罪を助けてたび給へ

「罪を助けて下さい」とお願いしています。これは当時、神仏習合だったこともベースにあると思いますね。

— 知識があればある分だけ、観ていて面白いわけですね。

源 そうですね、色々な方面から読んでいけるわけです。

神代の物語を語る理由は

源 後シテの「クリ」という謡の所で　それ神代の昔物語は末代の衆生の為　済度方便の事業。品々以って世の為なり　というものなのですが、シテは「神代の昔物語というのは。後の世の人たちが自分たちの成り立ちを知るためのものである」と語り、地謡は「色々な例をあげて、世のために残しているんですよ」と言っています。

つまりは「同じ過ちを繰り返さないよう、未来を造る時のすべとなるようにこの話を残すので、皆さんよく観なさいよ」と言っているわけです。そして「三輪伝説」を語ります。

―　「三輪伝説」というのは、仲睦まじい夫婦がいたが夫は夜にしか通ってこない。それを不審に思った妻が問うと夫は「正体が知られてしまうから、もう二度とここへは来られない」と言う。悲しんだ妻が帰っていく夫の衣に糸を付け、後を追っていくと、三輪のご神木に帰るのを見て、夫は三輪明神だったのかと驚くという話ですね。

このお話は、文楽や歌舞伎をよくご覧になる方はすぐに『妹背山婦女庭訓』の苧環（「糸を巻いて玉にしたもの）のお三輪さんの話だ！ と思い出すかもしれませんが、その大元の話が、この『三輪』のお能だったんですね。

源　そうですね。そして苧環の話をモチーフに神様と仏様、人という三つの輪、つまり「三輪」がここに出きるのです。ダビンチコードではないですがそんな風に色々な伏線や話が盛り込まれていて面白いんですよ。

観世流の小書「白式神神楽」

―　今回の『三輪』には小書が付きますね。小書とは特別な演出のことだそうで、これにより後シテが特別な演出になるんですね。

源　流派によって色々な小書がありますが、宗家以外の者は上演できなかったり、関西では観ることができなかったことから、京都の片山家が許されて江戸時代に作った小書が「白式神神楽」です。

―　白式神神楽になると衣装が白一色になり、髪型もスベラカシ（十二単の時の髪型）になったり見た目もガラリと変わるそうですが、演出の面ではいかがですか？

源　小書が付かない場合は、どちらかというと三輪神社の巫女に三輪の神様が乗り移ったという形なのですが、白式神神楽になると三輪神社の神様が現れたという形になり、文言も少し変わります。

そして天岩戸の話を舞うのですが、最初、天照大神が神楽を舞い天岩戸を閉めて閉じこもります。その後、八百万の神が岩戸の前で賑やかに神楽を舞うのですが、今度は八百万の神になって神楽を舞うわけです。そしてまた天照になり、岩戸を少し開けて覗く場面を演じます。

―　シテが天照大神になったり八百万の神様になったりするわけですか。

源　そうです。一人で演じ分けていくのです。この小書が付くことで、さらに神々しくなっていきます。

所作も『翁』と同じところが沢山出てきます。例えば袖を返して右手を挙げる所作、つまり太陽が照らしているという姿ですが、これが白式神神楽の中でもなされます。

―　ではお囃子も変わっていくわけですね。

源　神様自身が舞うことになるので厳かさが自然に出てくるようなお囃子になります。演奏も賑やかになったり、静かになったり、一人称になったり数人称になったり自然とリンクしています。でも、それをあざとらしくは演奏しませんね。最後、太鼓が打ち止むと元の世界に戻ります。そんな風に非常に演出効果が考えられています。ですから私たちもやっていて難しいけれど面白く、やりがいのある曲です。能にしか作れない世界観が出ていると思いますし、それを作り出したいと思います。

自分と対話する時間を

―　囃子方からご覧になって『三輪』という作品の面白いところはどこでしょうか。

源　ここが面白いと言ってしまうと観る時に確認作業になってしまうので、それは観てのお楽しみということにして（笑）。

それより、この舞台を観たことによって自分と対話をして欲しいんです。能は総合芸術ですから色々なジャンルとリンクすることができるんですよ。ですから自分の好きなジャンルと、どういう風に結べるか。それを見つけてもらえればいいなと思います。

今回、本（P5 で紹介）を書いたのですが、色々な方にコラムを書いていただきました。というのも能はターゲット層が決まっているわけではなく、老若男女全ての人が楽しめる芸能です。それを証明するために音楽家や彫刻家など色々なジャンルの人に「私にとっての能」について書いてもらいました。何をもって観ているのか、みんな違うんですよね。建築家は建築の視点から、宗教家は宗教の視点から観た面白さがあるんですね。

―　自分で楽しみの入口を見つけられたら。

源　これほど面白いものはないですね。能というのは能動的の「能」ですね。自分から働きかけて面白く楽しくするもの。テレビや映画のような受楽とは違うんです。そこが面白いですし、色々な関わり方ができると思います。

「春秋座―能と狂言」の面白さ

―　春秋座は歌舞伎劇場ですので、能舞台と響き方は違うものですか？

源　違いますね。春秋座は天井が高いから音が上に抜けているような気がして難しいんです。ですから能舞台で使っている鼓をそのまま使える時と使えない時もあるんです。

―　すると、毎回、いくつかの鼓を試されるわけですか？

源　そうなんです。結構、大変なんですよ（笑）。でも上手くいったときは良い充実感が得られますね。

―　歌舞伎舞台で花道を橋掛かりに

見立てて行う「春秋座―能と狂言」は９回目になるのですが、全回出演されてきて印象はいかがですか？

源　渡邊守章先生の演出で、あの空間でしかできないオリジナルのものを考えられているのが勉強になりますね。

それに劇場というのは、お客さんが付き、育つわけです。劇場に付いたお客様を大事にすることはとても大事ですね。ただ客が入れば良いというのではないく、そこの土地の人を育てるということをやって下さっているし、年々お能ファンが増えていることを感じます。ですから見巧者の中でやるのは張り合いがありますし、嬉しいですね。

―　最後になってしまったのですが、この度、人間国宝おめでとうございます。

源　ありがとうございます。責任が重くて。ですが、お能は平和的な考え方を打ち出している芸能だと思っています。人間は大自然の草みたいなものだから生きている間はみんなで楽しく過ごそう、という世界観があると思うんです。そういった能本来の面白さと、能の始まりをきちんと知らしていきたいなと思っています。

お能が出来た頃というのは、まだ先住民の文化と朝廷の支配がせめぎ合っていた頃の気配が色濃く残っていたと思うんです。ですから能の中で「互いに協力しないと良い国は作れないんだよ」と言い続けてきたと思うんです。そのコンセプトを共有し、伝えていくことは大事だと思っています。

これだけ世界中で多くの権力闘争が起きている中で、どうしていけばいいのかを考えた時、それを抑えるには芸術文化しかないなと思いたいですね。能楽は時代遅れと言われてしまうこともありますが、それでもそういった能のコンセプトを世界に発信して21世紀後半に向けて頑張っていけたらと思います。

―　囃子方や小鼓方としてという立ち位置ではなく、お能の魅力やコンセプトを伝えることをしていきたいと。

源　そうですね。鼓というのは能のツールの一つですね。たまたま僕は小鼓方という家に生まれましたけれど「小鼓が面白い」というのは、小鼓が面白いと思ってくれる人だけの話です。能が面白いということは笛も太鼓も大鼓もみんな含まれていることですからね。能楽のファンを増やすというのは、ひいてはお囃子の面白さにも気が付いていただけるのではないかなと思います。

―　ありがとうございました。

来年度は10回目を迎える「春秋座―能と狂言」の他、日本芸能史（P. ９）で囃子をテーマに渡邊守章が聞き手になり、亀井広忠さんとの講義もお願いしております。どうぞ、よろしくお願いいたします。

大倉源次郎（おおくら げんじろう）

小鼓方大倉流十六世宗家。1957年生まれ。15世宗家大倉長十郎の次男。父に師事。1964年、独鼓『鮎の段』で初舞台。1985年、大倉流宗家を継承。大阪文化祭奨励賞、大阪市咲くやこの花賞、2015年度第37回観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞。公益法人能楽協会理事。2017年重要無形文化財保持者（人間国宝）認定。

『三　輪』

登場人物

前シテ（前半の主役）　里の女
後シテ（後半の主役）　三輪明神
ワキ（主役の相手役）　玄賓僧都
間狂言（狂言方が担当する役）
三輪の里の男

ストーリー

三輪山の麓に隠棲する僧・玄賓の元に、いつも仏に供える花と水を運んでくる里の女がいました。ある日、夜寒をしのぐ衣を頂きたいと願い出た女は「自分は三輪の里に住む者で、杉の木を目印にやって来てほしい」と告げ姿を消します。そこへやって来た里の男から「玄賓の衣が三輪明神の御神木の杉に懸かっていた」と教えられ、玄賓は三輪の里へと向かいます。御神木に懸かった衣を見つけると「神の身の苦しみを、どうか救って下さい…」という声と共に三輪明神が出現し、明神が人間と契りを交わした三輪山伝説や天岩戸の物語を語り、神道の秘事を玄賓に明かすのでした。

大倉源次郎さんの新刊
『大倉源次郎の能楽談義』

大倉源次郎／語り・文
生田ケイ子・濱崎加奈子・原瑠璃彦／編
淡交社　A5判 272頁（カラー32頁）

狂言新時代へ

大蔵流狂言方三家が鼎立する関西の狂言界で、大名跡の襲名が相次いでいる。

2016年に茂山正邦改め一四世茂山千五郎、並びに十三世茂山千五郎改め五世茂山千作が、2017年には茂山良暢改め五世茂山忠三郎が、それぞれ襲名された。前者は当主の代替わり、後者は先代没後空席になっていた名跡の復活。そして2018年11月に二世善竹忠一郎改め二世善竹彌五郎が襲名される運びとなった。こちらは実に五三年ぶりの復活襲名となる。

初代善竹彌五郎（1883～1965）は、1964年に狂言師として初めて重要無形文化財各個認定、いわゆる人間国宝に選ばれた。没後半世紀以上が経過しており、映像は少し残っているものの、その舞台を実際に見た人も少なくなった今では、伝説の名人と言ってもいい。新しい彌五郎は先代の孫に当たる。善竹家を率いるリーダーとしてますますの活躍に期待したい。

戦後の狂言隆盛期、関西は善竹彌五郎に加え、三世茂山忠三郎、十一世茂山千五郎（三世千作）、の三名手があまたの名舞台を繰り広げた。私が堪能したのは次の世代で、善竹幸四郎、十二世茂山千五郎（四世千作）、二世茂山千之丞、四世茂山忠三郎、各師の至芸は今も記憶に新しい。まさに黄金時代。編集者として直接お話を伺う機会にも恵まれた。同時代に生まれ合わせたことは僥倖だった。

そして時代は進み、また新たな世代が台頭してきた。名跡も揃った。父から子へ、子から孫へと受け継がれる狂言の芸と技。鑑賞する側もまたそれを見守り続けていく。

2018年2月には春秋座に野村万作、萬斎父子が出演する。この二人だけでなく、東京にも多彩な狂言師が揃っている。異流や東西の交流、共演はかねてから行われてきたが、私たち観客にとって、各家の個性とともに、世代や地域を越えたコラボレーションを味わうことは、喜びであり刺激でもある。これから先どんな舞台が生まれるのだろうか。楽しみは尽きない。

森西真弓
大阪樟蔭女子大学教授

1955年京都市生まれ。京都女子大学卒業。元雑誌『上方芸能』編集代表。文化庁文化審議会本会委員、独立行政法人日本芸術文化振興会評議員などを歴任。主著に『上方芸能の魅惑』（NHK出版）編著に『上方芸能事典』（岩波書店）共著に『吉田玉男　文楽藝話』（国立劇場）他。「にっぽんの芸能」「古典芸能への招待」に出演。

CLIP　舞台芸術研究センター周辺で起こる、ホットな話題をお伝えします。

中島那奈子さんがエリオットヘイズ賞特別賞を受賞

舞台芸術研究センターが母体となって行っている共同利用・共同研究拠点における、共同研究プロジェクト「老いを巡るダンスドラマトゥルギー」の代表研究者である中島那奈子さんが2017年北米・ドラマトゥルク協会エリオットヘイズ賞特別賞を受賞しました。おめでとうございます。

川村毅さん作戯曲『4』が世界各地で上演

舞台芸術研究センター主任研究員である川村毅さん作の戯曲『4』が、2015年ニューヨークでのリーディング公演に続き、今年、コペンハーゲンでは川村毅さん演出によるリーディング公演が、ソウルでは韓国人若手演出家による公演が上演されました。

『4』は2012年東京・シアタートラム（白井晃氏演出）で初演され、川村毅さんが同年文化庁芸術選奨文部科学大臣賞と鶴屋南北戯曲賞を受賞した作品。

ソウルで上演された作品は、現地で高い評価を受け、2018年ソウル演劇祭での再演が決定しています。

交差点での 60 分

全国高等学校演劇大会のルールは厳しい。制限時間 60 分。1 秒でも超えると失格だ。その 60 分のために全国約 2000 校が準備を重ね、地区ごとに選ばれた一校が全国大会に出場できる。甲子園のようなものだ。この高校演劇大会については東京を拠点にするロロが『いつ高シリーズ』を上演したり、映画『幕が上がる』(作：平田オリザ）などでも注目された。

春秋座が開設された頃、高校生の私も初舞台を踏んだ。観劇した母の反応は「あんた、あんな表情できたんやねえ！」。その瞬間、母でも知らない自分がいるという小さな自立心を感じた。

それからは演劇に明け暮れた。朝も土日も部活。成績が下がり意地になって深夜まで勉強したり、公園で芝居について話し込み補導員に怒られたりもした。地元の大人達の劇団公演を観ては、憧れた。

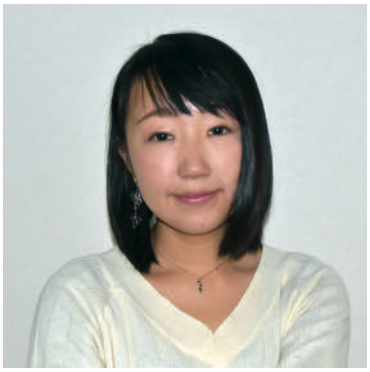
２年生の後半になると受験勉強に突入する。この頃、全国大会出場を狙う部員と受験勉強に集中したい部員とで部内は真っ二つに割れた。そこで私は気づいた。同じ制服を着た私達は交差点のど真ん中にいると。3 年かけて交差点を渡ったら、制服を脱ぎ別々の道を歩いて行くのだ。

話し合いの末、各自できる範囲で高校演劇大会を目指した。全員そろう稽古は限られていたが、それぞれが 60 分の舞台のために出せる力を注ぎ込んで臨んだ高校演劇大会。結果は、県大会入賞はしたものの敗退。悔しさと同時に達成感で気が抜けたことを覚えている。

大学は演劇を学ぶ学科を選んだ。同じ授業には全国大会で賞を獲った人達がいる。今度は、手の届かなかった彼らとともに演劇を創っていく。

専攻は「制作」。卒業後は劇場運営や劇団制作に携わる人が多い。演劇をもっと多くの人が気軽に楽しめたらという思いから、演劇を人々に届ける仕事がしたかった。結果的にライターという職種についたが、その目的は変わっていない。

今でもふとあの頃を思い出すことがある。千人規模の劇場でプロの舞台を観た後や、注目株の小劇場の公演を観た日の夜などに、ふいによぎるのだ。たくさんの制服が行き交う交差点での 60 分と、そのために過ごした日々を。



河野桃子
演劇ライター
高知県生まれ。高校演劇を経て、桜美林大学総合文化学科（現・芸術文化学群）にて演劇、制作、アートマネジメントを学ぶ。卒業後は週刊誌や経済誌などのメディアで記者、編集者として活動。現在は主に演劇やダンスのライター、制作をしている。

川口隆夫さん『大野一雄について』公演が、ニューヨークのダンスアワード「ベッシー賞」リバイバル作品部門でノミネート！

2015 年度共同研究プロジェクトの一環として春秋座で上演された川口隆夫さんソロダンスパフォーマンス『大野一雄について』が、その後、世界各地で上演され、昨年のニューヨーク・ジャパンソサエティでの公演で、ダンスアワード「ベッシー賞」リバイバル作品部門でノミネートされました。今回、受賞は逃したものの、各地で高い評価を得ており、現在日本ツアーが行われています。

『大野一雄について』…
ダンサー／コレオグラファーである川口隆夫さんが、故大野一雄氏の残された映像、創作のプロセスでうまれた言葉を基とし、同時代を共にした人々へのインタビューを重ね、大野一雄氏の舞踏へのアプローチを深めて振付を掘り起こした作品。

写真（右）：『大野一雄について』春秋座公演
撮影…松見拓也

【今後の『大野一雄について』上演スケジュール】
12月2日（土）・3日（日）
会場：彩の国さいたま芸術劇場
12月9日（土）　会場：高知県立美術館
お問い合わせ先
NPO 法人ダンスアーカイヴ構想
tel. 03–3450–6507

第1回：2018年1月27日(土) 14:00　**春秋座ロビー**
第2回・第3回：
2018年2月24日(土)、3月3日(土) 14:00
NA205 教室（京都造形芸術大学内）

歌舞伎、能、舞踊――
日本の舞台芸術の歴史を探る

公開トークシリーズ　渡邊守章が語る

〈伝統〉は何を遺(のこ)してきたのか？

伝統芸能から先端的な実験性の高い作品まで、演出家・渡邊守章が観てきた70年強に及ぶ多様なジャンルの舞台の記憶を元に、当時の写真や映像資料を観ながら当時の話や芸談などを語ります。　聞き手：森山直人

第一回　“六代目革命”――六代目尾上菊五郎
第二回　観世寿夫――能の「近代」とは何か
第三回　女形の諸相：六代目中村歌右衛門、
　　坂東玉三郎／花柳章太郎（新派）

「観世寿夫・ジャン＝ルイ・バローの立ち合い」より（於：銕仙会舞台 1977）

渡邊(わたなべ)　守章(もりあき)

演出家、フランス演劇研究者、京都造形芸術大学舞台芸術研究センター主任研究員、東京大学名誉教授。
1933年生まれ。主な演出作品にラシーヌ『フェードル』、ジュネ『女中たち』、ミュッセ『ロレンザッチョ』など。2005年発行の訳書、『繻子の靴』（上・下／岩波文庫）により、毎日出版文化賞、日本翻訳文化賞、小西財団日仏翻訳文学賞受賞。個人訳『マラルメ詩集』（2014年）。春秋座では、2016年12月に『繻子の靴』（全曲上演）を演出。

入場無料・要申込み
京都芸術劇場のホームページからお申込みいただけます。

T-C

2018年2月12日(月・祝) 14:00　**春秋座**
アフタートークあり
ゲスト：木ノ下裕一（木ノ下歌舞伎主宰）

今年も春秋座の舞台で高校生たちによる熱い演劇を！

高校演劇コンクール近畿大会優秀校
第17回「春秋座」招待公演

演じる高校生

「演じる高校生」とは、11月に開催される高校演劇コンクール近畿大会の優秀校2校を春秋座に招き、本格的な舞台で作品を上演する企画です。春秋座の柿落し以来、毎年開催し今年度で17回目を迎えます。
今年はどこの高校が春秋座の舞台に立ち、どんな作品を演じるのか。ご期待下さい！

昨年上演された兵庫県立東播磨高等学校『アルプススタンドのはしの方』は見事、全国大会で優勝しました！

出演校は2017年11月26日（日）に決定します。

出　演：
高校演劇コンクール近畿大会の優秀校2校の演劇部

最優秀校　兵庫県立東播磨高等学校『アルプススタンドのはしの方』

優秀校　和歌山県立串本古座高等学校『幸と歩』

【全席指定・12月6日(水)発売】
一般1500円　友の会1200円　学生＆ユース500円
※未就学児童の入場はご遠慮下さい。

T-C　OTS　ぴあ　生協

2018年3月18日(日)　春秋座
1部 13:00～、2部 17:00～

こんなに興奮する芸能は見たことない！
島根の長澤神楽社中と学生が共演

石見神楽　春秋座公演

【演目】※演目は変更する可能性があります。
一部　「塵輪」「天神」「頼政」「八岐大蛇」
二部　「加藤清正」「大江山」「恵比須大黒」「八岐大蛇」

石見神楽（いわみかぐら）は、島根県西部（石見=いわみ）地方に継承される伝統芸能で、絢爛豪華な刺繍衣装を身にまとい、喜怒哀楽の表情豊かな神楽面により、神話の物語を生き生きと表現する様は、観る人を一気に神代の世界へと誘います。

本公演は、石見神楽に魅了された若者が中心となり活動している本学の石見神楽サークル「京都瓜生山舞子連中」が主催として企画。本場・島根県より長澤流神楽の源流「長澤神楽社中」をお招きし学生メンバーも出演、共演します。

また、石見神楽をさらに楽しんでいただくために、衣装や面の仕組み（仕掛け）や、動作や所作の意味、演目の紹介を織り交ぜた解説も行います。

【全席自由・12月6日(水)発売】
一般 2500円　学生 1500円
※1回公演分につきの金額
（2公演通しての割引は無し、当日券は各 500円増し）

お問い合わせ：京都瓜生山舞子連中　小林泰三　tel.090–9504–6391

T-C　OTS

2018年夏、春秋座の舞台に立つ！　春秋座

速報！「演じるシニア」参加者決定！

2013年度に60歳以上の一般の方を募集して作品創作を行ない『レジェンド・オブ・LIVE』（構成・演出：杉原邦生）を上演した「演じるシニア」企画。その第2弾として再び、60歳以上の出演者を公募。「春秋座の舞台に立つ」を目標に、複数名の若手演出家・振付家による演出体験ワークショップを受け、新進気鋭の演出家・杉原邦生氏と共に2018年夏に本格的な舞台作品を上演する企画です。

11月3日（金・祝）に出演者の選考ワークショップを実施し、出演者が決定しました。また、京都造形芸術大学の学生も出演者、スタッフとして参加。一般公募で集まったプロジェクトチームも加わり、2018年1月よりワークショップを重ね、8月25日（土）、26日（日）の本番に向けて稽古を重ねていきます。

12 9日(土) 11:00／15:30　春秋座

京都芸術劇場 春秋座 芸術監督プログラム　特集▶P.T2

市川猿之助 監修

藤間勘十郎 春秋座 花形舞踊公演

【全席指定・発売中】
一般 9000 円　友の会 8000 円
学生＆ユース席 4000 円（座席範囲指定）

T-C　OTS　e+　ぴあ　生協　新聞

12 15日(金) 18:30、16日(土) 12:30　春秋座 特設客席

京都造形芸術大学 2017年度 舞台芸術学科 卒業制作

Ash「マヨイガノユクサキ」

作：**磯田葵**
演出：**長谷川万里子**

【全席自由・発売中】
前売り 800 円　当日 1000 円
予約 Web：https://www.quartet-online.net/ticket/ash08
お問い合わせ：075–791–8237

【主催】 京都造形芸術大学 舞台芸術学科

12 23日(土・祝) 14:00　春秋座 舞台上

2017年度共同研究プロジェクト

ゆるやかに振動する思想と劇場 ～筒井潤と4人のダンサーによる験(ため)しごと

演劇の演出家である筒井潤氏を招き、身体性、あるいはダンスという身体概念への問いを深める。演劇とダンスの差異、境界を見つめながら劇場実験として上演を行う。

参加ダンサー：**倉田翠、野田まどか、福岡まなみ、松尾恵美**
研究代表者：**山田せつ子**

【全席自由】無料・要申込み
※詳細は随時、更新します。**www.k-pac.org/kyoten/**

1 28日(日) 時間未定　studio21

2017年度共同研究プロジェクト

ダンス上演のオルタナティヴとなるワークショップの発明（タイトル未定）

ダンスの創作現場における「ワークショップ」の新たな在り方について、アーティスト3名が実践的な発表を行います。

参加アーティスト：**神村恵、篠田千明、砂連尾理**
研究代表者：**木村覚**

【全席自由】無料
※詳細は随時、更新します。**www.k-pac.org/kyoten/**

2 3日(土) 14:00 ※14時よりプレトークあり　春秋座

企画・監修 渡邊守章　特集▶P.2

春秋座 能と狂言

【全席指定・発売中】
S席　一般 7000 円　友の会　6000 円
A席　一般 6000 円　友の会　5000 円
学生＆ユース席 2500 円（座席範囲指定）
※未就学児童の入場はご遠慮ください。

S席完売

T-C　OTS　e+　ぴあ　生協

4 1日(日)～24日(火)　春秋座

都をどり in 春秋座

1日3回公演（約50分）
1回目 12:30　2回目 14:20　3回目 16:10　※休演日なし

【全席指定・12月1日発売】
茶券付特等観覧券 4600 円　壱等観覧券 3500 円

【チケットのお問い合わせ】
祇園甲部歌舞会 tel.075–541–3391（平日10～17時）
※京都芸術劇場では一般チケットのお取り扱いはございません。

チケットお問合せ先

京都芸術劇場チケットセンター

tel.075–791–8240

営業：平日10:00–17:00・公演開催日

京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター
京都芸術劇場 春秋座・studio21

606–8271 京都市左京区北白川瓜生山 2–116
tel.075–791–9207　fax.075–791–9438
E-mail. k-pac@kuad.kyoto-art.ac.jp
http://www.k-pac.org　京都芸術劇場　検索

京都芸術劇場友の会 会員募集中！
詳しくは http://k-pac.org/?page_id=33

T-C 京都芸術劇場チケットセンター　OTS 劇場オンラインチケットストア
e+ イープラス— http://eplus.jp
ぴあ チケットぴあ— http://t.pia.jp tel.0570–02–9999
生協 京都、滋賀各大学生協プレイガイド
新聞 京都新聞文化センター（京都新聞社1F）
tel.075–256–0007（窓口のみ 10–17時 ※土・日・祝除く）
KBS KBS京都事業部
tel.075–431–8300（電話のみ 10–17時 ※土・日・祝除く）

＊記載のないものについての開場は開演30分前
＊特に表記のない場合、前売と当日は同じ料金
＊ユースは25歳以下対象（一部公演を除く）
＊学生・ユースは要身分証明書提示

カーテンコール

今年度最後のニュースレターとなりました。今年度の最後は恒例の「演じる高校生」、来年度は「都をどり」でスタートいたします。みなさまどうぞ、足をお運びください。〔S〕

学習意欲のある方なら、どなたでも受講いただけます

2018年度 日本芸能史

人間国宝とは文化財保護法に基づき重要無形文化財の保持者として認定された「人」を指す通称である。無形文化財とは、演劇、音楽、工芸技術その他の無形の文化的所産をいう。これに対し建造物、絵画、彫刻、工芸品などの「物」を有形文化財という。
人間国宝の演劇・音楽部門はそのまま芸能であるが、工芸は芸道である。他方、有形文化財はすべて芸道である。文化財保護法を制定したときに、芸能や芸道が考慮されたとは思えない。しかし、日本人が伝統文化について何らかの制度や組織を創ろうとするとき、必然的に、芸能と芸道、その両者を誕生させた祭り、そして祭りの主役となる神が働きかけてくるのである。
「人間国宝の世界」「能と狂言の世界」の二つのテーマを貫くものは、これまで本講座が追求してきた「神と人」である。

企画・コーディネーター
京都造形芸術大学 教授
田口章子

【日　程】
毎　回：月曜日　16:30～17:50
前　期：5月7日～6月25日（全8回）
後　期：9月24日～12月24日（全14回）
受講料各期：1万5千円
会　場：京都芸術劇場 春秋座（京都造形芸術大学内）

【受講資格】
学習意欲のある方なら、どなたでも受講いただけます。

【お問合せ・資料請求先】
京都造形芸術大学　京都藝術学舎
〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2–116 人間館中2階
tel.075–791–9124　fax.075–791–9021
受付：月～土曜日／午前10時～午後4時
休日：日曜日・祝日・入学試験実施日・年末・年始

前　期　人間国宝の世界

先人たちの芸を受け継ぎ、自らが求めつづけた世界を、後世に伝承していく。重要無形文化財保持者（各個認定）の道のり／使命とは何か。

① **総　論**　諏訪春雄
② **能**　大槻文藏　〔聞き手：天野文雄〕
③ **三　線**　照喜名朝一　〔聞き手：嘉数道彦〕
④ **琵　琶**　奥村旭翠　〔聞き手：田口章子〕
⑤ **文楽三味線**　鶴澤清治　〔聞き手：田口章子〕
⑥ **狂　言**　山本東次郎　〔聞き手：天野文雄〕
⑦ **長唄三味線**　今藤政太郎　〔聞き手：田口章子〕
⑧ **京　舞**　井上八千代　〔聞き手：田口章子〕

後　期　能と狂言の世界

能の舞台をつくりだすシテ（五流）、ワキ、囃子、謡と狂言（二流）のトップランナーたちによる一期一会の出会い。

① **総論　能・狂言の誕生**　諏訪春雄
② **理論　能という舞台芸術**　天野文雄
③ **シ　テ**　金春安明（金春流前宗家）
④ **謡**　井上裕久（観世流 シテ方）〔聞き手：天野文雄〕
⑤ **シ　テ**　観世清和（観世宗家）〔聞き手：天野文雄〕
⑥ **狂　言**　茂山忠三郎（大蔵流）
⑦ **シ　テ**　金剛永謹（金剛流宗家）
⑧ **ワ　キ**　福王茂十郎（福王流宗家）
⑨ **囃子 笛方**　藤田六郎兵衛（藤田流家元）〔聞き手：渡邊守章〕
⑩ **シ　テ**　宝生和英（宝生流宗家）
⑪ **狂　言**　野村萬斎（和泉流）〔聞き手：渡邊守章〕
⑫ **シ　テ**　髙林白牛口二（喜多流）〔聞き手：天野文雄〕
⑬ **囃子 鼓方**　大倉源次郎（大倉流小鼓方宗家）
亀井広忠（葛野流大鼓方家元）
〔聞き手：渡邊守章〕
⑭ **理論　日本文化の象徴としての能・狂言**　諏訪春雄

アクセス
◉ JR・近鉄「京都」駅、京阪「三条」駅、阪急「河原町」駅から
京都市バス5系統「岩倉」行きに乗車、「上終町京都造形芸大前」下車
（「京都」駅から約50分、「三条」・「河原町」駅から約30分）
◉京都市営地下鉄「丸太町」・「北大路」駅（北大路バスターミナル）から
京都市バス204系統循環「高野・銀閣寺」行きに乗車、
「上終町京都造形芸大前」下車（約15分）
◉京阪電車「出町柳」駅から叡山電車に乗り換え、「茶山」駅下車、徒歩約10分
◉タクシーご利用の場合、「京都」駅から約30分。地下鉄「今出川」駅から約15分
（「京都」～「今出川」は地下鉄で約10分）
※所要時間はあくまで参考としての標準時間です。天候や交通事情により変わりますのでご注意ください。
※駐車場はございませんので、お車・バイクでのご来場はご遠慮ください。

発行日—2017年12月1日
発行／編集—京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター
デザイン…吉羽 一之（Simple Hope Design Room）
京都芸術劇場ニュースレター vol.39

撮影：公文健太郎

京都芸術劇場 ニュースレター

shunjuza
studio21
Newsletter

特集

春秋座 能と狂言 ― 2P〜5P

京都芸術劇場 春秋座 芸術監督プログラム
市川猿之助 監修
藤間勘十郎 春秋座 花形舞踊公演 ― T•2P〜T•5P

vol.39
2017.12

京都芸術劇場 春秋座 芸術監督プログラム

市川猿之助 監修

藤間勘十郎 春秋座 花形舞踊公演

十二月九日、十日に開催を予定しておりました「市川猿之助 藤間勘十郎 春秋座 花形舞踊公演」は、春秋座芸術監督の市川猿之助が負傷したため出演ができなくなりました。「自分が出演できなくても、楽しみにしておられるお客様のためにも公演は開催したい」という芸術監督の意向を受け、一部内容・日程を変更して市川猿之助監修「藤間勘十郎 春秋座 花形舞踊公演」として開催することを決定しました。

藤間勘十郎さんを中心に今最も注目される若手歌舞伎俳優たち、若柳流五世宗家家元若柳吉蔵さんに実力派舞踊家のみなさんにも新たにご参加いただきます。

演目も再構成して大変魅力的な番組内容となりました。ここ春秋座でしかご覧いただけない花形舞踊をぜひお見逃しなく、存分にご堪能下さいますようお願い申し上げます。

春秋座プロデューサー 舘野

2017年12月9日(土) 11:00／15:30

会　場：春秋座

出演者：藤間勘十郎、尾上右近、中村隼人、中村玉太郎、中村梅丸、若柳吉蔵、花柳凜、若柳佑輝子

◉公演情報の詳細はスケジュール一覧〈P.10〉をご覧ください。

この度は皆さまに多大なご心配をおかけいたしまして、誠に申し訳ありません。

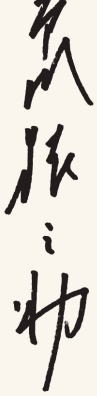
目下、療養中でございますが、おかげさまで骨折した腕以外はいたって元気でございます。

本来予定されていた舞踊公演に出演が叶いませんことは、残念でなりませんが、今回開催されますこの花形舞踊公演は、非常に素敵な出演者、そして、演目が並びました。

ことに「流星」は、私が演じた猿之助型とも言える〝宙乗り〟をご披露いたします。また、藤間勘十郎さんは、これから共に手を携え、藝道を歩んでゆく同志でございます。その同志である勘十郎さんの素晴らしい舞踊を、この機会に是非一人でも多くの方に春秋座へお出かけいただき、ご覧いただければと思っております。

平成二十九年
十二月吉日

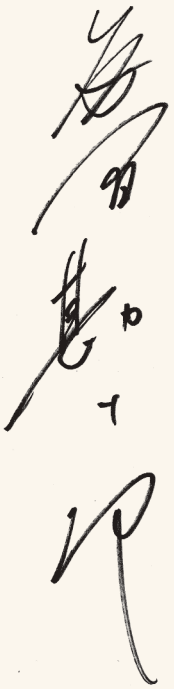
四代目　市川猿之助



此の度大変残念乍ら市川猿之助丈怪我の為、予定しておりました二人の舞踊公演を急遽私一人にてさせて頂く事となりました。現在本格的な舞踊を見せられる人は彼をおいて他には考えられず、猿之助丈不在の舞台ではございますが、私がいつもの何十倍のパワーを発揮して全身全霊で勤める所存でございます。次回猿之助丈と二人で勤める舞台へ繋がる公演を、より多くの皆様に御高覧頂ければ幸いに存じます。

宗家藤間流　八世宗家　藤間勘十郎

平成二九年一二月吉日



【11時開演の部】

一、二人三番叟　長唄囃子連中

翁　藤間勘十郎
千歳　中村玉太郎
三番叟　中村隼人
三番叟　中村梅丸

二、流星　清元連中

尾上右近宙乗り相勤め申し候

流星　尾上右近
牽牛　中村隼人
織女　中村梅丸

三、春興鏡獅子　長唄囃子連中

小姓弥生
後に獅子の精　藤間勘十郎
飛鳥井　尾上右近
渋井五左衛門　中村隼人
関口十太夫　中村玉太郎
吉野　中村梅丸
胡蝶の精　花柳凜
胡蝶の精　若柳佑輝子

【15時30分開演の部】

一、流星　清元連中

尾上右近宙乗り相勤め申し候

流星　尾上右近
牽牛　中村隼人
織女　中村梅丸

二、日高川　清元連中

清姫　藤間勘十郎
船頭　若柳吉蔵

三、京鹿子娘道成寺　長唄囃子連中

白拍子花子
実は蛇体　藤間勘十郎
強力　尾上右近
強力　中村隼人
強力　中村玉太郎
強力　中村梅丸

演目紹介

文・藤間勘十郎

二人三番叟（にんさんばそう）

様々な三番叟がありますが、この作品は以前新橋演舞場『初春大歌舞伎』の際に私が構成したもので、長唄の三番叟の面白い部分を集約し、さらに私が作曲した部分を加えた作品です。現在伸び盛りの隼人さん、小さな頃から私共の元に御稽古に通う玉太郎さん、梅丸さん、今後の活躍を期待するこの三人による千歳と三番叟で、会の幕開けにふさわしい華やかな演目です。

流星（りゅうせい）

七夕の夜、牽牛と織女の年に一度の逢瀬の場面に流星が現れ、雷夫婦の喧嘩のあらましを語る名作舞踊の一つです。今回は若手の実力俳優の右近さんを流星、牽牛に隼人さん、織女に梅丸さんを加え、若さ溢れる人選にて上演致します。

春興鏡獅子（しゅんきょうかがみじし）

「道成寺」と並ぶ日本舞踊の代表曲の一つです。私自身のライフワークとして、歌舞伎舞踊を素踊りとして上演していく事を続けており、本作品を含め様々な作品に挑戦しております。今後も歌舞伎の振付師として先人から学んだことを後世に伝えるだけでなく、自分自身の想いを込めて表現していきたいと考えています。今回は父梅若玄祥の発案で、後の衣装に能装束を用いて勤めます。

日高川（ひだかがわ）

約十年前に、清元の素演奏曲として私が作曲した作品ですが、本公演にて初めて舞踊化して上演いたします。今回は人形振りではなく素踊り作品としまして、日高川の場面より清姫の霊が恋い慕う安珍を焼き殺す鐘巻の場面を、私が兄のように慕う若柳吉蔵様の御力をお借りして上演致します。

京鹿子娘道成寺（きょうがのこむすめどうじょうじ）

以前十八代目中村勘三郎丈の為に、登場する所化を強力に替えて作った作品を今回素踊りにて上演します。場面は鐘入後の蛇体までとなり、前曲の「日高川」で清姫を描き、本曲ではその清姫の霊が憑いた白拍子花子までを描いております。続けて御覧頂きます事により、皆様により深く作品の世界を感じて頂ければと思います。